

## 文学博士高崎直道君の「如来蔵思想の形成」に対する

### 授賞審査要旨

如来蔵（仏性）思想とは、「一切衆生悉有仏性」という一文によって表明されている如きの大乗仏教における主要な思想の随一である。それは、著者の言葉を借用すれば、「仏教とは、仏の教えであるとともに、仏になる教えである。凡夫が仏になることを目標とするのが仏教一般の基本的性格であるが、特にこの仏となる可能性の根拠を凡夫自身の本性のうちに求める教説」——「一切衆生に如来たるべき因（如来蔵）が有るといふ説——である。

ところで、この如来蔵思想は、すでに学界において周知されている如く、「宝性論」(Ratnagotravibhāga・究竟一乗宝性論)において思想的に体系化され、一応の完成をみている。従って、著者は、この「宝性論」において体系化されている思想を如来蔵思想と仮設的に定義し、その思想が如何にして形成されるに至ったか、というきわめて難解な大問題を文献学的研究によって説明しようとしたのが本書である。

本書では、まず「序論」において、「宝性論」に関する研究成果、「宝性論」に基づく如来蔵思想の基本構造などを論じ、次に、本論として、第一篇「如来蔵思想の形成」では、「宝性論」との関係の上で、如来蔵系經典の代表的なもの「如来蔵経」「不増不减経」「勝鬘経」に対する検討、「宝性論」において明確に「如来蔵」の同義語とされている「仏性 (Buddhahatu)」が説かれている「涅槃経」「央掘魔羅経」「大法鼓経」「大薩遮尼乾子所説経」に対する検

討、如来蔵と深い関係にある「種姓 (gotra)」に関する「大雲經」「大乘十法經」に対する検討、如来蔵とアーラヤ識との関係についての「金光明經」「勝鬘經」に対する検討等々がなされ、第二篇「如来蔵思想前史」では、如来蔵思想の源泉としての「般若經」「法華經」に対する検討、如来の種姓を説く「宝積經・迦葉品」「維摩經」「華嚴經(入法界品、十地經、性起經)」に対する検討、如来蔵思想の中で重要な位置を占める如来業について「宝性論」と関係の深い「智光明莊嚴經」「陀羅尼自在王經」「大集經」の諸品に対する検討等々がなされ、最後に、結論として「如来蔵思想形成史」(如来蔵系經典の訳経史、如来蔵をめぐる諸概念、残された問題)が論じられている。

以上のような本書の内容概観に基づいて、本書の価値を列挙すれば、次のことがいえるであろう。

第一に、本書は、如来蔵思想が「宝性論」において体系化されるに至るまでの如来蔵思想の形成に対する文献学的研究であるが、これは、「宝性論」以降の如来蔵思想解釈の展開の跡を、チベット文献資料を駆使して克明に辿った D.S. Ruegg; *La Théorie du Tathāgatagarbha et du Gotra* (Paris, 1969) と並んで、決して見劣りしない如来蔵思想研究としての世界的な大著であり、この二著作によって、如来蔵思想に関する文献学的研究は大成され、一応の終止符が打たれたかの観がある。

第二に、本書は、先に概観した内容からも知られる如く、梵蔵漢に亘る龐大な数にのぼる仏教文献資料のすべてを精査した労作であって、検討の対象となった主な文献は八十三余に及んでいる。従って、今後の如来蔵思想に関する各方面からの研究にとって、本書はあたかも百科辞典的な役割をはたす研究者座右の書として、その学界にもたらず貢献度はきわめて大きい。

第三に、従来、如来藏（仏性）思想は、中国・日本の仏教界の長い伝統の中にあつて主流的な位置を占めてきたが、必ずしも明確に体系化された思想としてあつたわけではなかつた。その如来藏思想が、「宝性論」の研究を基本としつつ、インド・チベットの仏教を含む仏教全体の上で検討されている現今にあつて、その思想形成の根拠を文献的に網羅し明確にしたことの功績は大きい。